ウズベキスタンとの拠点交流事業の実施―動物の現生標本づくり―

10～11月にウズベキスタンのサマルカンド考古学研究所で専門家研修をおこないました。本研修は文化庁から受託している文化遺産国際協力拠点交流事業の一環で、奈文研ニュースNo.90記事の続報です。前回研修で来日したウズベキスタン研究者は、奈良文化財研究所で多種多様な現生標本をみて大変驚いていました。現生標本は出土骨の同定根拠であり正確な同定をするための大切な研究資料です。しかし彼らの研究所は、出土骨は大量にあるものの現生標本を全く持っていませんでした。そこで、今回の研修では自分たちで標本を作製することにしました。

選んだのは中央アジアで馴染みのあるヒツジとニワトリです。まずは種、性別、全長や部位ごとの長さ、体重など記録していきます。続いて、メスを使って骨以外の余計なものをできる限り取り除き、部位ごとにネットに入れて大鍋で煮込みます（研究所の庭にピラフ用の大鍋を設置しました）。ある程度煮込んだら骨を一度水で洗い流し、付着した肉や筋をできるだけ取り除いた後、新しい水で再び煮込みます。通常、これらの作業を数日繰り返すことで標本は完成しますが、今回の研修は時間の制約があるためこれで作業終了です。続きは火よりも管理が容易ということでバイオ製剤（納豆菌の仲間）を溶かした水に入れゆっくりとタンパク質を分解させることにしました。さてどんな仕上がりになったのか。この結果は次回の研修でウズベキスタン研究者に報告してもらう予定です。皆様どうぞご期待ください。

（企画調整部　村上 夏希）

メスを使って部位ごとに解体している様子

『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』の刊行

毎年、奈良文化財研究所では飛鳥地域や藤原宮・京、平城宮・京といった広い地域において、数多くの発掘調査を実施しています。その調査内容と成果について、昨年度までは『奈良文化財研究所紀要』（以下、『紀要』）に掲載してきました。しかし、奈文研全体の調査研究報告としての『紀要』の性格上、調査の概要報告にとどまらざるを得ず、内容としてやや不充分なものでした。そこで、2023年度からは、発掘調査の成果報告をより充実した内容にするため、『紀要』から独立したかたちで正式な発掘調査報告書を毎年発刊することとし、その第１号として、『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』（以下、『報告2023』）を刊行しました。

この『報告2023』では、『紀要』よりも出土遺物の記述を充実させるとともに、巻末にカラー図版の頁を新たに設け、遺構・遺物の迫力ある写真を多数かつ大きく掲載しています。さらに、過去に実施した発掘調査の遺構・遺物を再整理することによってあきらかとなった研究成果報告も掲載するなど、過去１年間に都城発掘調査部でおこなった調査研究の成果を、余すところなく報告しています。『報告2023』については、一般向けの販売はしていませんが、より多くの方々にご覧いただけるよう、『全国遺跡報告総覧』にて全文のPDFデータを無料公開しています（https://sitereports.nabunken.go.jp/132930）。奈文研が実施した最新の調査成果をどなたでも簡単に入手することができますので、ぜひご覧ください。

（都城発掘調査部　林 正憲）

『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』